

墓地。土管の墓がユニーク

開拓使に内緒でつくった身近な



特徴的な土管型の墓。現在はこの一群だけになってしまった

近くに墓を

明治4年(1871)に白石に入植した旧仙台藩倉小十郎の家来たちの墓地として白石中央墓地が設置された。

現在の国道12号に沿った約4*⁰の入植地区間のうち、墓地が設置されたのは札幌側から1.5*⁰ほどの場所だった。現在の感覚では遠い距離ではないが、先祖との対話を大切にし、日常的に墓参りをした昔は、距離は重要な問題だった。

入植地の東側に住む人々からの強い要望で、白石村では明治5年に開拓使の開墾役所に次のように懇願している。

「48番地屋敷裏に墓地を割り当てていただきましたが、100戸に1カ所では不便です。もう1カ所89番地屋敷の裏に50間(90^坪)四方の土地がありますので、これも墓地に割り当てていただきたくお願いします」

しかし、開墾役所は「1村に1カ所が決まりである」と請願を却下した。この墓地は許可のないまま開設されたため、正式な記録は残っていないが、明治13年ころと記した書類がある。正式に許可を受けたのは明治35年(1902)4月だった。

ユニークな土管型の墓

開拓者の墓ではないが、この墓地でひときわ人目を引くのは、大正期以降

に作られた土管型の焼き物の墓標である。戒名、死亡年月日などを粘土に彫り込み、上薬をかけて茶色く焼きあげたもので、今なお鮮やかな色つやを保っている。次第に普通の石材の墓に変わり、現存するのは野田荒吉が作った数個だけになった。

野田荒吉は愛知県から鈴木レンガ工場(明治17年~大正11年)に瓦職人として来村した。今こそ瓦屋根は見られなくなったが、昭和初期までは一般住居の屋根にも広く使われた。

墓は当時は石山軟石(凝灰岩)か木製の卒塔婆が一般的だったが、野田荒吉は瓦職人の特技を生かして焼き物で家族や知人の墓を作った。昔の職人は特技を生かして身の回りのものを何でも作ったが、墓さえも作ったのだ。

隣にキリスト教墓地

この墓地に接してキリスト教徒の墓地がある。昭和7年(1932)日本札幌教区天主教宣教師社団が、信者の埋葬地として本通墓地南側に土地を購入し、白石村に寄付し、キリスト教墓域として使用した。その後拡大されて今日に至っている。

(塚本謙蔵)

